

ふるさとの昔話



天間の田代

矢筒石

天間田代区の公会堂となっている山神社の東側に、矢筒石と呼ばれる石があります。今回は、この石に伝わるお話を、天間田代の前島重一さん（八十歳）に語っていただきました。



▷矢筒石



▷語ってくれた前島重一さん

薬の液が出る石

昔、天間に鈴木平左衛門という人がいました。この人はよい政治を行い、大豪族となりました。鈴木氏は以後も栄えたのですが、十何代かの後、自分の利益しか考えない悪徳の人が当主となりました。あるとき、この当主は天間の横道に矢筒石という石のあるのを知り、自分の物にしようと思いました。矢筒石は特殊な養分を含んでおり、底にたまつた水を飲めば胃病が治り、顔につければ、そばかすが治るといわれていました。その石を掘り起こすというので、村人たちは大反対をしました。しかし、当主は遠くから大勢の大工を呼んで、石の掘り出しを始めました。すると、急に旋風が吹き、けが人が出ました。その後も工事のたびに風が吹き、恐れた工事人たちは皆逃げてしまいました。あきらめきれない当主は、別の職人を連れてきて、石を途中から

切断し、ついに屋敷に運び込みました。ところが、当主はこうした横暴がたたり、人々から見放され一家離散の運命に見舞われました。石が物のけに

それから矢筒石は田んぼの中に放置されたまま年月がたちました。あるとき、由比町の茶人が矢筒石に目をつけ庭石にしました。ところが、やはりこの家にも不幸が続くようになりました。ある晩、この家のおばあさんが「私は石です。元のところへ帰りたいたい」という物のけに目覚めました。翌朝、おばあさんは家族にこの話をし、すぐに石を元に戻しました。昭和の初め、当時の青年団が現在の山神社に手厚く移しました。

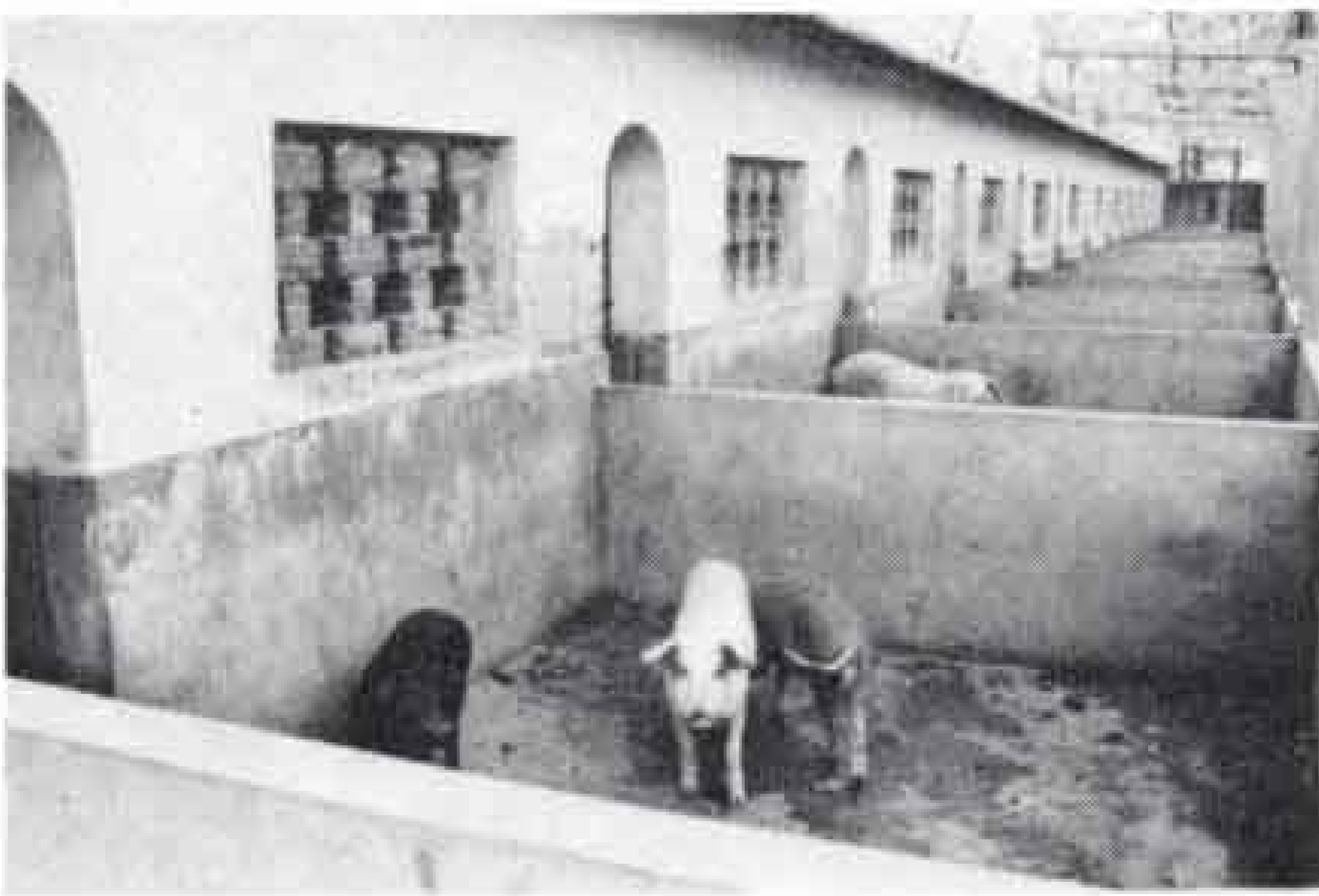
頼朝が休んだところ

また、昔、源頼朝が富士の巻き狩りのとき、このあたりで休憩し、この石に矢筒をさして休んだという話も伝わっています。

ニイハオ 你好



▽清潔な豚舎



嘉興双橋農場

嘉興双橋農場は高品質の農作物を効率よく生産する国営農場です。特に、稲・麦・牧畜を主体とし、果樹園や淡水魚の養殖なども行っています。耕地面積は25.3%。1986年の穀物生産量は211ト、豚の出荷量は5,000頭以上、養殖淡水魚は106.6ト、果物12.9トで、総生産額は105万元（約3,675万円）です。

ここでは単位面積当たりの生産量を向上させるために、年間を通じて大麦・小麦・野菜類の後、早稲、晩稲の三毛作を実施しています。また、品種改良を重視し、機械化も進めています。

現在の農場労働者は101人。労働者一人当たりの平均年収は1,500~2,000円（約5万2,500円~7万円）。国の基準を上まわる生産物については労働者の収入となるため、生産の積極性が高まっています。定年は男60歳、女50歳で労働者の生活条件は、近年明らかに改良されてきました。

地名の由来



△鷹岡小学校前

久沢村も厚原村と同じように、その成立はかなり古く、鎌倉時代にさかのぼることが出来ます。久沢村と厚原村の村境を流れる横沢は、その源を富士山の不動沢に発しています。流末は潤井川に注いでいるかなりの長流で、その流れを久沢と呼び、村の名にもしたと伝えられます。久沢村は明治二十二年、厚原村、天間村、入山瀬村と合併して鷹岡村となりました。

こちら編集室

地域の会合でのこと。なぜか話題が新しくできた公園のトイレの話になりました。大半の人は気に入ってくれたようでしたが、A氏は「しゃれすぎて、なじめない」B氏は「外観よりも問題は内」と手厳しい評価。そして二人は、「広報ふじで見たけど」と前置きして、しばしトイレ談義。みなさんも一度ごらんください。